

追悼 “巨匠マウリツィオ・ポリーニ”

プログラム

今年の3月23日、世界的な大ピアニスト、マウリツィオ・ポリーニ氏が亡くなりました。享年82。2月6日に小澤征爾氏の訃報を聞いたばかりで、相次ぐ巨匠の訃報はクラシック・ファンの心を痛めました。今日は得意としたベートーヴェン、ショパン、ブラームスの名曲をお聴きいただき、この巨匠を偲びたいと思います。マウリツィオ・ポリーニは1942年1月5日、イタリアのミラノで生まれました。父親は有名な建築家ジノ・ポリーニ、母親は声楽もこなすピアニストでした。5歳でピアノを始め、カルロ・ロナティ、カルロ・ヴィドゥッツに学び、ヴェルディ音楽院在学中の1957年15歳でジュネーヴ国際コンクールで第2位、1959年の第1回ポッツォーリ国際ピアノコンクールで優勝、さらに1960年、18歳の時第6回ショパン国際ピアノコンクールで優勝し、一躍国際的なピアニストの仲間入りを果たしました。この時の審査委員長だった大ピアニスト、アルトゥール・ルービンシュタインが「彼はここにいる我々審査員の誰よりも上手く弾く」と言った、という有名なエピソードが残っています。しかし、ポリーニはその後8年間世界の表舞台での演奏活動を行わず、勉強に励み、アルトゥーロ・ベネデッティ＝ミケランジェリのもとで研鑽を積みました。1968年に表舞台に復帰、1970年以降は世界各地でセンセーショナルな成功を収め、世界最高のピアニストとして君臨しました。日本へは、1974年に初来日、最後となった2018年まで、来日は16回を数えます。晩年は体調不良などでキャンセルが多くなりましたが、2023年10月30日、スイス、チューリッヒ・トーンハレでのリサイタルが最後の演奏となり、2024年3月23日、イタリア、ミラノの自宅で82年の生涯を閉じました。ポリーニの特徴を一般的に言えば、「正確無比な鉄壁のテクニックと、研ぎ澄まされた切れ味の鋭い透明感のある明晰な音色」という事になるのかも知れません。しかし、それ以上に、そんな枠を超えた、作品に対する深い愛情と情熱を持っていたピアニストでもあった、と言えるような気がします。 (中川)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827): ピアノ・ソナタ第23番へ短調Op.57 “熱情”

マウリツィオ・ポリーニ (ピアノ)
(1986.5.16 NHKホールでのLive)

フレデリック・ショパン (1810~1849): ピアノ協奏曲第2番へ短調Op.21

マウリツィオ・ポリーニ (ピアノ)
カール・メレシユ指揮フランクフルト放送交響楽団
(1972.10.27 ヘッセン放送協会大ホールでのLive)

*** 休憩 ***

ヨハネス・ブラームス (1833~1897): ピアノ協奏曲第2番変ロ長調Op.83

マウリツィオ・ポリーニ (ピアノ)
ロリン・マゼール指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1983.5.15 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

フレデリック・ショパン (1810~1849): 練習曲第11番イ短調 “木枯らし” Op.25の11

マウリツィオ・ポリーニ (ピアノ)
(1990.9.29 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

曲目解説

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第23番へ短調Op.57 “熱情”

ドイツの生んだ偉大な作曲家ベートーヴェンは、9曲の交響曲、7曲の協奏曲、16曲の弦楽四重奏曲、10曲のヴァイオリン・ソナタなど多くの名曲を残しましたが、ピアノ・ソナタは約27年間で32曲の作品を残しました。第1番を書き上げたのが1795年、最後の32番は1822年に完成していますが、**第23番「熱情」**は、1804年第21番「ワルトシュタイン」と同じ頃作曲が始められ、先に完成した第21番より約1年後の1805年には完成したとされています。一説によれば、作曲の背景にはひとりの女性が深く関わっていると言われていています。それはヨゼフィーネ・ブルンスヴィックという女性で、ハンガリーの伯爵であったブルンスヴィック家とは四人の兄妹と家族ぐるみの付き合いをしていましたが、二女のヨゼフィーネがベートーヴェンのピアノレッスンを受けるようになった1804年10月頃から、ふたりは恋に陥り、熱いラブレターを交わす間柄になりました。「熱情」ソナタはこの時期に作曲されていて、創作の原動力となった事は間違いない、とされています。曲はフランツ・ブルンスヴィック伯爵に献呈されました。なお、題名の「熱情」は自身が付けたものではなく、出版の際に付けられたものです。第8番「悲愴」が初期の代表的な名曲とすれば、第23番「熱情」は中期のピアノ・ソナタの傑作です。

第1楽章 アレグロ・アツサイ 第2楽章 アンダンテ・コン・モート
第3楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ

ショパン：ピアノ協奏曲第2番へ短調Op.21

ポーランドの生んだ天才ショパンは「ピアノの詩人」と呼ばれ、数少ない室内楽作品と歌曲を除いて、生涯作品のほとんどをピアノのために作曲し、のちのピアノ音楽に大きな影響を与えました。2曲の**ピアノ協奏曲**は第1番が1830年、**第2番**はその前年、1829年19歳のときに作曲されましたが、出版されたのが第1番より後だったために、作曲年と番号が逆になっています。初演も第1番より数カ月早く、1830年3月17日にワルシャワで、ショパンのピアノ独奏によって行なわれました。第2楽章は親友ティトウスにあてた手紙の中で、ワルシャワ音楽院で声楽を学んでいたコンスタンティア・グラドコフスカという女性に恋心を抱いていることを打ち明けていて、「この初恋の相手を思いつめている間に第2楽章を作った」と告白している事からも、初恋の女性への想いが色濃く反映された曲となっています。曲は1836年の出版に際して、パリに出て晩年まで長い友情で結ばれたデルフィナ・ポトツカ伯爵夫人に献呈されました。第1番同様、詩情豊かな旋律とロマンティックな楽想が胸を打つ名曲です。

第1楽章 マエストーソ 第2楽章 ラルゲット 第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

ブラームス：ピアノ協奏曲第2番変ロ長調Op.83

ロマン派を代表する大作曲家ブラームスは、多くの分野で傑作を残しましたが、2曲あるピアノ協奏曲のうち第1番はもうすぐ25歳の誕生日を迎えようとする1858年2月に完成しました。しかし、それから20年以上もの間、ブラームスはこの分野から遠ざかってしまいます。1878年4月、友人たちとイタリアの旅に出たブラームスは、あこがれの土地にすっかり魅せられてしまい、この年の夏、ペルチャツハへ避暑に出かけた時、イタリアの思い出をこめたピアノ協奏曲を計画し、作曲を始めました。しかしこの夏にはヴァイオリン協奏曲などに力を入れたため、ピアノ協奏曲は中断したままになっていました。1881年3月、ブラームスは再びイタリア旅行に出かけ、第1回目の鮮烈な印象と重ね合わせて、5月にウィーンに戻ると早速中断していた**ピアノ協奏曲第2番**の完成に取りかかりました。曲は7月上旬に完成、同じ年の11月9日、ブダペストのレドイテサールで、ブラームス自身のピアノとアレクサンダー・エルケルの指揮によって初演されました。曲は4楽章形式の規模の大きなもので、至難の技巧を要求される難曲ですが、ピアノが華麗な技巧でオーケストラを圧倒するといったものではなく、むしろオーケストラのなかに溶け込み、管弦楽と一体となってシンフォニックな響きを創りだしています。古今のピアノ協奏曲のなかでも人気が高く、現代の名ピアニスト達の重要なレパートリーになっている傑作です。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ 第2楽章 アレグロ・アパッシオナート
第3楽章 アンダンテ 第4楽章 アレグレット・グラツィオーソ

ショパン：練習曲第11番イ短調 “木枯らし” Op.25の11

ショパンの練習曲（エチュード）はそれまでピアノの技術的な練習をするための音楽とされてきた練習曲を芸術的な音楽性を備えた楽曲として確立させました。作品10の12曲は1829年から1831年までの間に、作品25の12曲は1832年から1836年までの間に書き上げられました。これら全24曲は多くの曲がまだショパンが20代前半に書かれており、のちに開拓して行くショパンの音楽のひとつの足掛かりとなった作品とも言われています。作品10の練習曲集はリストに献呈され、作品25の練習曲集は1837年に出版され、リストの恋人であったマリー・ダグー伯爵夫人に献呈されました。練習曲という枠を超え、精緻な美しさを表現した名曲で、**第11番**の題名は出版社が付けたものですが、「木枯らし」という愛称で親しまれています。